

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 369 回 経営者の浪費の勧め

2010.6.20

浪費はいかなる場合もやってはいけない。でも昨今の経営者、いかにもケチで、スケールが小さく、ジコチュウ（自己中心的）が多い。だからあえて今、「経営者の浪費の勧め」で、世の批判を浴びてみたい。浪費＝無駄づかいではなく、つかい方の術（すべ）と考えてみた。

時間をつかう

時間とは、量的に平等で質的には不平等である。時間に関して最も素晴らしい事の一つは、前もって時間をムダ使いできないという事。質的に不平等である時間は、したがって、人により、そのつかい方によって「差」が生じると言うことに他ならない。これこそ、チャンス意外、何者でもない。「夢実現のための時間」をあらかじめ確保してしまい、それに合わせてスケジュールリングを組み立てていくだけでも、日々の暮らし方はそれまでと変わったものになるに違いない。あとは個々の「作業」にどれだけ集中して、効率的に処理していけばいいかだ。たとえば、朝の過ごし方、これだけ変えることで、大きな時間が生まれてくる。未来はいつでも最大限に活用できる状態になっている。今、ここを大切にするために、時間を上手くつかうしかない。

金をつかう

お金は使い方によって、「生き金」にも「死に金」にもなる。自分の理想の生き様（いきざま）の実践の為に使ってこそ、はじめてお金に価値があると思う。問題は、自分にとって本当に価値のあるものがわからない場合、それと価値観そのものの違い、この二つの理由で、金儲けと贅沢な生活の追求が生きる目的になってしまう。何を自分の人生で優先させるかを知っている人は、それ以外のことにはあまりこだわらない。このような人は、金額の多少でなく、生きたお金を使っているといえるかもしれない。

「自分を褒めてやりたい」「自分へのプレゼント」...どこかで聞いたことある言葉だが、小生大嫌い、実に、身勝手に不愉快な言葉である。たとえば、従業員とのコミュニケーションのための支出、従業員の家族への思い、会社の経費ではなく、社長の小遣いを予算化しているか？ ケチケチ運動の結果、将来への投資を見逃していないか？ 費用対効果の分析を怠っていないか？ 使うべき金は使うべし！である。

気をつかう

経営者はオーケストラの指揮者と同じ。ヴァイオリンやトランペットの演奏はプレーヤーより劣るかもしれないが、目指すべき「音楽づくり」の力量は、誰よりも優れている。そのためにはプレーヤー一人ひとりの技量レベルはもちろん、体調と精神状態、環境の変化、楽器（ツール）の状況、温度・湿度等の気候変化による音程調整、音響・ホールの状況等々、ほとんどすべてを熟知し、作曲家の意図を読み取り、そこに自分の思い込みを注入して、楽団員全員を一つのベクトルに向かって全力投球をさせる...これができるキーポイントは、繊細なデリカシー、当然の常識力と深い教養度、強固な精神力とリーダーシップをベースとした、目一杯の「気配り」である。瞬時に変化を察知し対応する、その能力こそ、いかに気を遣う事ができるか否かの分岐点であろう。経営者は「ノー天気」な「極楽とんぼ」では、恐らく務まらないと思っている。

人をつかう

こんな経営者であれば、たぶん人がついてくるだろう。一人で出来ることは限度がある。二人が十人、百人になって、一緒に同じ人生を目指し同志が集まれば、結果は、予想以上の大きな効果を創出するに違いない。「優秀な人を使える」とは、これこそ、経営者冥利（みょうり）に尽きるというものである。